



研究部だより

No.1 令和5年7月発行

研究主題

生涯にわたる豊かな学びを目指した授業づくり
～児童生徒の夢や願いを基点とした

「わかはとシステム」の構築～

全校授業研究会 小学部

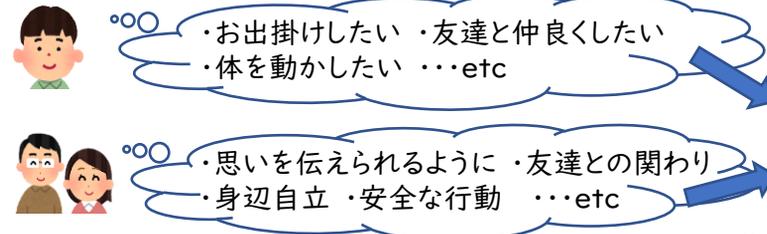
小学部あおば学級 生活単元学習 レッツゴーあおば ～先生のおすすめスポットにでかけよう～

<「わかはとシステム」による授業づくり>

小学部あおば学級では「わかはとシステム」に基づいた授業づくりを行い、6月16日に全校授業研究会を開きました。“児童の夢や願い”を基点に、どのような資質・能力を育めばよいのか、そのために、本単元で目指すねらいをどう設定するのか、そして、生涯学習力の高まりをどう見取るのか。今回の研究部だよりでは、授業づくりの過程や全校授業研究会でいただいた御意見・御助言をお伝えします。



○児童との面談、保護者との面談による、“夢や願い”の聞き取り・見取り



わたしのおうえんけいかく

氏名(自署)	保護者氏名(自署)
学年	学年科目

児童の生活・現在の生活に関する願い

本人の願い

- ・友達や先生と一緒にいろいろなことに挑戦してみたい
- ・自分の経験や思いをほかの子と共有したい
- ・行事や発表会など、褒められたり喜ぶことがほしい
- ・イベントや行事などに参加して楽しみたい
- ・いろいろな活動やことに挑戦したい
- ・いろいろな活動やことに挑戦したい

保護者・家族の願い

- ・自分のことは自分でできるようにしてほしい
- ・自分の思いや考えを表現できるようにしてほしい
- ・自分の名前が書けるようになってほしい
- ・自分の名前が書けるようになってほしい
- ・自分の名前が書けるようになってほしい

ア 基本的な日常生活動作を身に付け、自分でできることを増やすための支援（運動器用、感覚系、食事のマ

○「わたしのおうえんけいかく」の作成

「生涯学習力」の広がりや深まりのモデル			
人につながる	なままといっしょに	人とながかりをもとに広げようとしている	人とながかりを広げよう・深めようとしている
情報を集める	見てみよう・聞いてみようとしている	調べて聞いて調べようとしている	経験をまかそうとしている
試す	やってみようとしている	考えて試してみようとしている	挑戦し続けようとしている
自分を知る	好きなことを知ろうとしている	いろいろな自分を知ろうとしている	なりた自分を知ろうとしている

「生涯学習力」を広げたり深めたりするための基盤【好奇心】【興味・関心】【夢中】

児童が夢や願いを叶えるためにどのような力が必要？

教師が子どもに願う姿

わかはとモデルの視点



生活単元学習「レッツゴーあおば」
“身近な地域の施設の利用→まとめる”という一連の流れの経験を通して、地域で活動する楽しさを知ったり、実感したりする。



生活単元学習「レッツゴーあおば ～学校近くを探検しよう～」
学校周辺を散策して身近な商業施設について知り、利用することを通して体験したことを自分なりの言葉や方法で表現し、地図にまとめる。



身近な施設に気付いたり、見付けたりすることはできたが、行ってみようという気持ちが薄い・・・

つながりミーティング

目的をもつことで、「行ってみたい」と思えるようにするしかけが必要！



生活単元学習「レッツゴーあおば ～先生のおすすめスポットにでかけよう～」
身近な教師へのインタビューを通して、秋田市内の公共施設について知り、実際に利用してまとめる活動を繰り返し行う。

目的をもって「行きたい」と思えるようにするためのしかけ



Point

【身近な教師へのインタビュー】

・「教えてね」と伝えることで、その後の展開への必然性につなげる。

【体験活動】

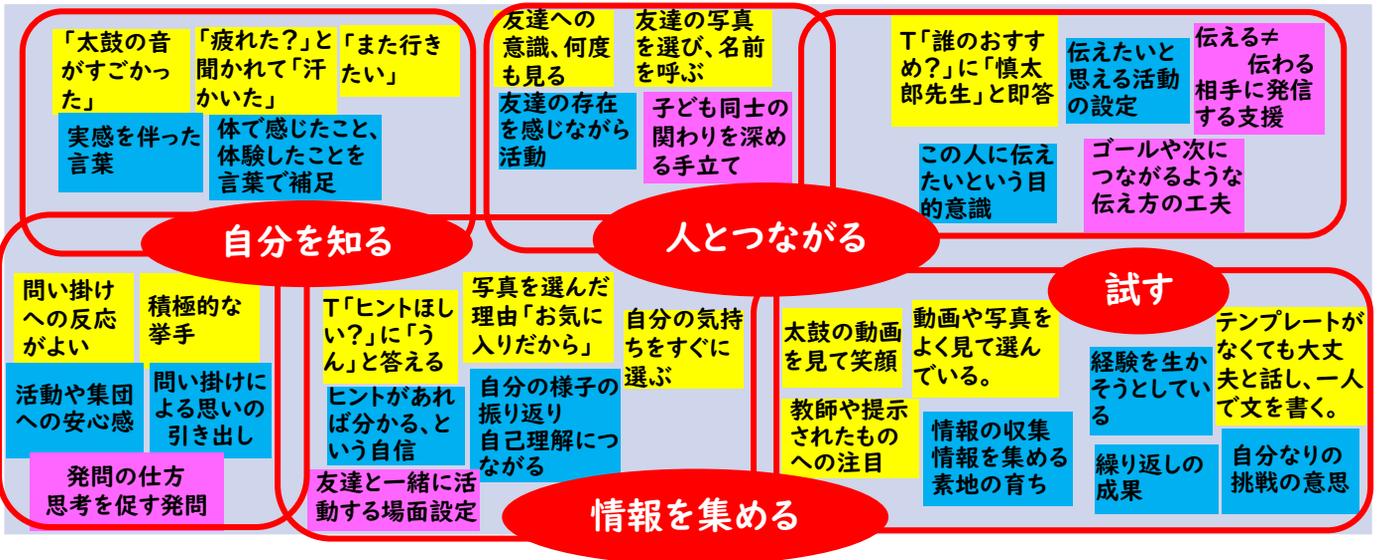
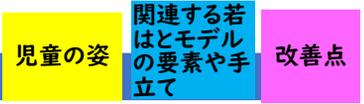
・児童の興味・関心に即して五感を活用した活動の体験。

【振り返りでの思いの表出】

・思いを呼び起こしたり、表出したりするための動画の活用、制作活動の設定。

研究会 協議から

協議題「児童の姿から学びを見取る～わかはとモデルの分析と改善のために～」



【協議で話題になったこと、改善点】

- ・友達の様子を気にするような姿が多く見られた。活動によってはペアにするなど、教師が介入しなくても子ども同士が関わりを深められるような場面設定や手立て➡️“人とのつながり”の高まりにつながる。
- ・教師や集団との安心感がベースにあることで、積極的に答えようとしていた。発問の工夫 ➡️ 考えて言葉を表出する機会にしたい。
- ・“伝えること”と“伝わること”は違う。“好きを知る”発達段階では、「思いを表現する」ことがねらいでも◎。
- ・実感したことを振り返って表していた。わかはとモデルのどの要素に関連するのか、分けづらい姿もあった。

研究協力者の先生から

<秋田大学教育文化学部准教授 鈴木徹先生>

- ・落ち着いた、大人っぽい雰囲気の中でしっかりと授業が進んでいた。
- ・児童Bの確認行動が、ポジティブなものかネガティブなものか、見取りを深めていくことが必要である。
- ・実態差による難しさは、何に興味があるのかをよく観察し、配慮していくことが必要である。
- ・児童が何を伝えたいのかを明確にすることが大切である。場所だけではなく、行って帰ってくるまでの一連の工程と捉えると、提示する写真も変わる。
- ・子どもたち自身が写真を撮ってみることで、何をどう見ているのかが見えてくる。
- ・興味・関心が膨らむと、誰かに伝えたいくなる。伝わらない経験をすることで、どうしたら伝わるかを思考する契機になる。

<秋田県総合教育センター指導主事 進藤拓歩先生>

- ・ICTの使い方やバランスを考慮した授業であり、準備した教材が、児童の前向きな発言を引き出していた。
- ・最初の感想➡️思い出竿燈作り➡️まとめの感想という流れ。活動を経て感想がどう変わるのか、感想の深まりが大切。
- ・教師は制作よりも振り返ることを重視していたが、児童は作ることを重視していたのではないか。教師の意図と児童の感じ方で、一致しているところと乖離しているところを明確にし、擦り合わせていく必要がある。
- ・主体的・対話的で深い学びを実現するために、授業をどうデザインするのか。主体的=生涯にわたって能動的に学びに向かうということである。
- ・小単元のねらいと単元のねらいが繋がっていること、学んだ「(知・技)」を活用して「(思・判・表)」を育む指導計画を立てる必要がある。
- ・育成すべき資質・能力を明確にし、わかはとモデルやわかはとシステムを効果的に活用していけるとよい。

Next➡️全校授業研究会(高等部)についてお伝えします。